

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
は一11	半夏厚朴湯	半夏 (辛平) 10g・厚朴 (苦温) 3g・茯苓 (甘平) 4g・生姜 (辛温) 5g・乾蘇葉 (辛温) 2g 上の5味を水280mlを以て煮て160mlとなし、4回に分けて、日に3回、夜1回温めて服用する。
傷寒論・金匱要略条文		
読み および解説・その他		
婦人雜病脈証併治第二十二第5条 (金匱要略)		
「婦人咽中に炙臑有るが如きは半夏厚朴湯之を主る。千金、胸満心下堅きを作し、咽中怙怙として炙肉有るが如く、之を吐するも出でず、之を呑まんとすれど下らず。」		
炙臑、主る、作し、怙 怙として、出でず、下らず		
解説 婦人の咽の中に、炙臑 (炙った肉) が引っかかっている様な感じのするものは、半夏厚朴湯が主治する。		
千金に「胸がいっぱい張って、みぞおちの辺りが堅くなって、咽の中に炙臑 (炙った肉) がある様で、痞えた様な感じがあり、吐き出そうと思って吐いても出でず、呑み込もうとしても呑み込めない状態をいう。」とある。		
厥陰肝脈は、気管の後ろを循り、上って咽頭に入る。故に血室の鬱気が水飲を伴って上昇し、咽頭に附着したもので、半夏厚朴湯の半夏・生姜で水飲を降下し、茯苓で利尿し、厚朴・蘇葉で咽頭の鬱気を散じる。		
半夏厚朴湯の咽候のいがらっぽさは、いつも咽候がおかしいと訴えるのに対し、炙甘草湯の咽候のいがらっぽさは、発作的であり、いつも訴えることはない		
半夏厚朴湯証 新古方薬囊によれば「金匱要略にては、婦人の咽中炙臑を治す。咽中炙臑とは、咽の中に何かあぶりたる肉の塊りの様な物が痞えたるが如き感じがして、呑めども下らず、吐けども出でずと言うものの事なり。かくの如き証のある者には、先ず本方を試むるの要あるなり。」と記されている。		